

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

- われわれの運動 新たな情勢と日常活動…………… 2
- 内外から噴き出す田辺退陣要求…………… 4
- 金丸辞任後の自民と野党 われわれの政治を変える方針 ——
- 人権を守るため、工場閉鎖攻撃に抗す…………… 7
- 大倉電気争議団代表 川田 晃生 ——
- 話し合いが職場抵抗闘争の土台…………… 11
- 職場闘争改善へのとりくみ (一) ——
- P K O 反対に行動をおこせ…………… 14
- 怠惰は最大の敵 ——
- 日本的「現実主義」の構造…………… 15
- 国鉄闘争に広がる支援・連帯の輪…………… 17
- 天理市の教組が「激励交流」記録を発刊 ——
- 役人の子はにぎにぎをよく覚え…………… 3
- 読者からのおたより…………… 18

旬刊 社会通信

NO. 521

一九九二年一月一日

一九九二年一月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■ 巻頭言 ■

われわれの運動

新たな情勢と日常活動

岩井 章

1. 自主性、自発性、大衆路線の実現

今日もつとも必要なことは、自分の頭で情勢を考え、自主的、自発的な運動を作っていくことである。選挙結果を見ても、幹部と職場労働者の間に大きな開きがあることは明白だ。とくに連合幹部と現場労働者の乖離が、激しいことをこの選挙結果は示した。幹部は旧態依然として指令型運動で日常を糊塗しているし、職場労働者はそれを無視している。例えば、「社民路線」などと連合幹部が大声で叫んでみても、現場はそれに納得していない。だから、幹部は様々な考えを提起して、本格的な討論を起すよう指導することが必要だ。大衆の力を引き出すよう工夫することだ。

よく言われるように、何千何万の力を結集しないかぎり、資本と対抗できないのは明白だし、大衆はその力を持っているのだ。大衆が持てる力を発揮できるよう、幹部は援助を与えることである。

最近の幹部の姿勢をみると、大衆に奉仕するという姿勢が少なくなって、自己保身にはしる者が多くなってきた。今日幹部になっている人に、「主義者」として一生涯を闘った先人のように望んでも無理があるろうが、せめて清潔に身を処し、現場労働者と共に闘い暮らす心構えをもってもらいたい。

官僚主義は労働運動の中でも最も警戒、排除しなければならない。官僚主義になれば発展性が全くなくなるし、単なる月給取り根性となって保身にはしることとなる。

2. 幹部、活動家は思想性をもて

資本主義体制であるかぎり搾取はあるし、したがって当然階級間の対立、闘争は継続する。マルクス主義はいぜん労働者階級解放の思想、哲学である。今日ソ連・東欧が崩壊したが、それは社会主義思想が崩壊したのではない。社会主義建設に誤りがあったのだ。しばしば私が指摘してきたことだが、労働運動の指導者や活動家が長期的に闘いの先頭に立ち続けるためには、確固とした哲学、思想を持たなければやっけない。

一時的には資本の弾圧、横暴に怒りをもって闘うことは比較的容易なことだが、怒りという感情だけでは長期に燃え続けさせるのは難しい。理性としての思想、哲学をもって、長期的に闘わねばならない。われわれはマルクス主義思想をもって、日本という特殊な条件に適合する闘いの道を創造することが必要だ。

3. 運動の重点

イ、組合民主主義の徹底

労働組合がますます官僚化し、資本主義体制に取りこまれていく状況を打ち破るためには、組合民主主義の徹底こそ必要だ。幹部だけで総てを決めるのではなく、組合員の大衆討議によって決めていく作風が重要だ。

ロ、当面職場闘争（活動）地域運動を重点とする

国労などの不当解雇にみられるように、資本に対抗し闘う組合は例外なく弾圧される。職場の「合理化」、人べらしはますます強まり、人権は無視されている。このような「合理化」攻撃に抵抗することは容易ではない。しかし、全く不可能ではない。猛烈な労働強化、過労死、サービス残業、通勤地獄、住宅不足など労働者の不満は広く、強くなっている。われわれは要求を通して多数派を作るよう努力し、あわせて活動家仲間を作る努力をすれば、それは不可能ではない。現に様々のグループによる学習会、討論会など各地で相変わらず続けられているし、その努力が運動の源泉となっている。

また当然のことだが市民運動との提携をさらに強めなければならない。先日の参議院選挙をみても、労働組合よりむしろ市民グループが運動の先頭に立っていた例も全国的に多くある。われわれの運動は市民グループとの提携を重視し、努力することで、多数派形成が可能となる。

4. 当面の要求、特に国鉄闘争、反PKO闘争

われわれの要求は、生活、平和、民主主義、人権、環境の五つに集約できる。この闘いは改憲反対に発展させていかねばならない。

今日とくに重要なのは、国鉄闘争と自衛隊の海外派兵反対の闘いである。国鉄闘争は五・二八（中労委の和解案提示と国労の即時拒否）以降、当然のことながら長期戦となった。何年かけても必ず勝利する体制作りをすることだ。それには闘争団員の生活、JR労働者の反合闘争、共闘の広がり、三つが重点だ。一方自衛隊の海外派兵がいよいよ具体化してくる。やがて憲法改悪をねらってくる。われわれは海外派兵反対の大衆行動を作らねばならない。

「役人の子はにぎにぎをよく覚え」

江戸時代後半（一八〇〇年頃）文化文政期の川柳——中学歴史の教科書にも登場しています。「にぎにぎって?」「汚職・ロッキード・リクルート!」中学生の活発な返答です。

今、佐川汚職で新潟県知事三億、金丸五億の献金汚職。前者は辞職、後者は上申書・二〇万円の罰金で済まそうとしている（二〇・一現在）。

「報道陣が金丸邸を囲んでいるので出頭できない」子どもでもダメせない言いわけ。

「憲法一四条 法の下の平等」——金丸氏は例外で特別の人? 検察は?

昨年四月、「学校の先生やめて議員になるのって……政治家って汚いからイヤだな」と正直に言ってくれた卒業生A子さん、どう考えますか? 確かに、スジ（憲法法律）が消えて、ホンネ（権力者優先）が横行している今の日本社会。こんな現状を今の子どもたちの心は「そんなもんさ」と受けとるのか。「イヤ正さねば」と考えるのか。

先の川柳の時代背景を中学歴史教科書には、『不安な社会の中では、元祿のように人生をまじめに見つめる態度はうすくなり……ひにくやしゃれが喜ばれ、川柳や狂歌が流行……』と書かれています。

汚職がはびこり、まじめさを失った江戸社会は、このあとわずか五〇年余で崩壊しました。さて、今の平和社会は? そして、わが市政は大丈夫?

（千葉・T）

内外から噴き出す田辺退陣要求

金丸辞任後の自民と野党―われわれの政治を変える方針

金丸退陣による新たな動き

往生ぎわの悪い金丸信自民党元副総裁もついに衆議院議員を辞任した。与野党に暗い影響をもつていた人物だけにその後の政治的な動きは慌ただしい。これまでは金丸さん、金丸大先生といってきた、子分的なヤツほど手の裏をかえしたように、金丸氏から見れば裏切りの言動を開始している。金丸辞任は何を政治にもたらしているのか、革新の側はこれをどう考えるべきかを見ることにしよう。

金丸を辞任に追い込んだのは世論の力であることは間違いないが、その世論を盛り上げる決定的な力を発揮したのはマスコミであった。それではマスコミのキャンペーンを促進したのは何であったのか。第一には、日本の支配層の中核である財界の「危機感」であった。田中角栄、金丸、竹下に世話になった財界は正面切って「金丸辞めろ」とはいえないので政治改革（中味は小選挙区制中心の）をおこなえといってきた。そして景気対策のための補正予算が遅れることを気にしてもいた。

財界にとって一番のねがいは、自民・官僚政治の長期的安定である。その補完になるようであれば「日本新党」も推すわけである。いよいよ自民体制が弱くなるようであれば、まず公明・民社の力を借りようとする。それでも安定性を欠くとすれば社会党を加えた保革大連立政府の樹立をも望むことになる。金丸・竹下・小沢ラインは、社会党の田辺氏と組んで自民・竹下派プラス社会・政構研プラス民社で新党をつくり、保守二党制にしようというものである。そうなれば日本の現支配層の傘の下で政治が大きく安定してゆくことになる。保守二党間の政権交替（もしくは大連立）は多少のゴタゴタがあっても安心してみえられるし、財界の望む方向で諸政策が実行されてゆくわけである。金丸氏の退陣によって、この方式に少し誤差は生ずるけれども基本的には変更はない。むしろ金丸氏の退陣によって「危機感」が増大し、財界の望む「政界再編」は促進される可能性が強まることも考えられる（現に小選挙区制は大きく前に出てきている）。

財界・官僚にとって今一番恐れているのは自民党派閥の対立で政界流動化が進み、勤労国民が「反自民・反財界」の「世論」側につくことである。マスコミを使ってこれからはどう現在の勤労者の「政治不信」に対して「ガス抜き」をするか、というのが財界の意図するところであろう。幸い日本人は熱しやすく冷めやすく封建時代から育てられてきたから、今度も政治不信が財界不信に結び付く前に押え込むつもりらしい。新聞・テレビが不況で広告収入が落ち込んでいるという背景があり、政治的圧力をかけやすい。自然なやり方で「新党待望論」をつくりあげ、反自民・反財界の革新勢力へは分断・縮小をはかってゆく。したがって新党論議のなかではますます「左派切り捨て」「選別・排除」が盛んになるわけである。

自民党派閥はどう変わるか

自民最大派閥・竹下派の分裂は時間の問題となった。派内の主導権争いの姿をとっている。もともと竹下派というのは旧田中派であり、田中角栄元首相の政治手法を受け継いでいる。それは「政治は力」、「力は数」というわけで、その「数」をつくり出し維持するのは「金」である。金力をつくり出すのが「政治権力」であるという論理であり、その通りに実行してきたのが金丸・竹下・小沢ラインである。

かつて竹下登元首相が五、六年前に、一〇〇人の派閥を保持してゆくためには「月一億円で足りないなあ」と語ったという。彼はその金集めをやってきたわけで、汚職事件が表面化するたびに竹下登の名が浮上するのもうなすけるのである。

竹下派は事実上分裂したが、「金力」と「ポスト宮沢」に対応するために竹下登、金丸信（国会は引退してもまだまだ力は残っている）などが梶山・小沢両分派のカスガイの役割を果たしてゆこうとするのであろう。しかしいずれにせよ臨時国会での対応が課題である。もし金丸・竹下両氏の証人喚問、ついで竹下議員辞任などが実現すれば竹下派＝自民党は大混乱となる。

一方の可能性としては、小沢一郎氏が（金丸がバックにいる）保守新党をめざすことが考えられる。自民党内にも若手を中心に欲求不満が充満しており、ボス支配から抜け出すということ、超派閥的な結集が考えられるだけでなく、具体的には加藤グループなどの他派や場合によっては、「日本新党」と手を組むことも考えられる。もちろん一朝にして成るものではないが、社会党の一部にもこれに賛同する空気があり、公明、民社、「連合」も日頃の付き合いから賛同する背景・条件は大である。

公明党の市川書記長は創価学会の池田大作名誉会長の指令で動いているのであるから変わることも当然ありうる。しかし基本的に公明党・学会は常に権力にとり入ろうとしたのであって、今後も連立政府に加わることを視野におき、力のある派閥を通じて自民党との関係を深めるものとみられる。

民社党は大内委員長が中心に金丸・小沢ラインと付き合い、都知事選、PKO法で自民党と同一歩調をとってきた。自民党への協力を通じて現実野党（実際は現実への迎合）として、独自色を出し、生き残ろうとしている。しかし、次の総選挙では一ケタのミニ政党化は必至の状況であるだけに、「新党構想」が出れば「渡しに舟」で喜んで参加することになろう。

社会党の混乱も始まっている

社会党の田辺誠委員長は、参院選敗北の責任もとらず、金丸事件についても国民におわびすらしていない。田辺氏とその側近への批難はゴウゴウたるものがある。歴代委員長でこのようなブザマな例があったであろうか。そしてついには自民党の建設大臣からまで金丸さんと共に田辺さんも辞めるべきだと批判された。これは「結党以来の侮辱だ」（山花書記長）というわけであるが、一般の良識ある国民は「拍手喝采」しているのだから情けない限りである。田辺氏の地元群馬県本大会でも批判が噴き出した。社会党は各ブロック会議を開催したがこの会議でも田辺執行部批判が続出し、このままでは社会党は田辺不信が拡大するだけのようだ。これに対し執行部は正式の大会につぐ決議機関である中央委

員会を一月に招集することになった。

しかしこの中央委員会も執行部は、「佐川事件追及の決り集会的なもの」にするつもりのようなのだが、参院選後初の正式機関会議が形式的に開いただけというわけにはゆくまい。中央委員クラスは各県本の国会か県会の議員が多数であるからと甘くみているようだが、執行部山花書記長は政治感覚の上で大きくズレている。それは彼には革新政党の書記長としての哲学や指導性がないからであろう。この大事な情勢下に田辺といひ山花といひ最低の委員長・書記長をもったものであるというのが、全国の党員の共通した慨嘆である。われわれは嘆いているときではない。すでに各地から「田辺執行部のもとでは次の選挙（総選挙と地方選・都議選など）はたたかえない」という声が機会あるごとに出されている。党員多数の声は「天の声」である。このままの執行部の体制では選挙はもちろん、「党改革」、「党再建」は夢また夢である。

われわれの政治を変える方針

それではどうするのか。社会党が野党第一党としての責任を果たし国民の信頼をとりもどすための方策は、次のことを実践すべきである。

- (一) 佐川汚職事件の徹底究明を次のことで行う。①金丸と竹下の証人喚問によって、五億円の議員への配布先を明らかにする。②暴力団の介入の事実経過を明確にする。③「佐川」との関係、ことに五億以外の献金についての有無について。
- (二) 竹下元首相に対しては議員辞職勧告決議を提出する。
- (三) 佐川清元社長の証人喚問を行う。
- (四) 「共和」についても阿部元長官の証人喚問を行う。
- (五) 社会党は一月の中央委員会において、中央執行部の総辞職を行い、早急に臨時大会を開催して新しい執行部を選出し（委員長は全党員の投票、社会党の再建強化策を立案し、全党の討議を行う。その中で党内民主主義の復活（年一回の大会、国会議員即代議員権の廃止、全ての党員は基本組織に属することなど）によって党組織の活性化をはかる。
- (六) 政治改革については、①企業・団体献金の禁止、献金は全て個人とする。②全ての選挙活動のうち金のかかる運動は原則として公営とする。候補と運動員の使う費用を厳しく制限する。③選挙区制は三―四人区の中選挙区（原則として五人区ナシ）として、定数は正を二対一に厳しく割り当てる。④公職選挙法、政治資金規制法を佐川事件の教訓のうえに全面的に改正する（公務員の立候補の規制、連座制など）。⑤国会改革を行う。情報の公開、委員会を自由傍聴とする、議員立法のための秘書の増員、調査機関の充実など。
- (七) 社会党の革新政府めざしての路線としては、憲法を活かして①国際貢献②軍縮と平和施策③社会保障④環境保全⑤国民生活などの諸方針・政策を盛り込んだ「行動綱領」を策定し、国民との対話、共同活動と取り組む。

社会党への不信を一掃するみち

社会党は田辺委員長の金丸氏をはじめとしての料亭政治、国対政治によってどれだけダメージを受けたか計り知れない。またその他でも「佐川」から献金を受けていた吉田、武

藤、辻、などの議員の問題もある。ことに武藤山治はたびたび（明電工事件、佐川事件など）名前を出して恥じるところがない。しかし執行部は何らの処分もしていない。武藤氏は「政構研」派閥の代表であるから執行部は何もできないのか。そんな不公平なことはない。こういうところにも田辺執行部が不信をもたれる大きな問題点がある。直ちに本人も自己批判して議員を辞任すべきである。

田辺誠社会党委員長長の退陣（とりまき共々に）については、本誌でもたびたび提起してきた。本人が辞めようとしても側近が辞めさせないのか。それでは金丸氏とその点でも同じではないか。田辺氏はただ辞めるだけではなく「国対政治」としての政治と国会の裏の面を今後の改革のために「自己批判的に」報告書を社会党に提出すべきであろう。いずれにせよ田辺氏の退陣なくしては、明日の社会党はなく、党への不信は拡大し党そのものが消滅の方向に歩むことになる。（社会通信政権研究班）

人権を守るため、工場閉鎖攻撃に抗す

——大倉電気争議団代表 川田晃生——

一九九二年七月二七日

一九九二年七月二七日朝、大倉電気秩父工場全職場で一通の封筒が全組合員に配布されました。それは「解雇予告通知」と「配転内示」でした。一片の紙には「貴方を八月一七日を以て解雇する」、あるいは「〇〇工場（事業所）への配転を内示する」とのまったく問答無用の暴挙でした。職場は一瞬のうちに怒りと不安と突然の衝撃が走り、「なぜ私が解雇なのか、秩父工場で三〇数年に亘り会社の大きくなる姿を見続け、その礎となってきた私を……」「五〇を過ぎたが女房も働いておらずこの先どう暮らせというのか、殺してやりたいくらいだ」「私たち婦人を往復四時間もかかるところへ配転させるなんて……、帰宅は八時頃になり果たして働き続けられるのか」などと次々に憤り・抗議の声が会社へぶつけられました。

私は、この問答無用の秩父工場閉鎖と全員の指名整理解雇・強制配転をこのまま許すならば、働くものの人権や民主主義・平和も失われてしまう、なんとしてでもたたかって撤回させなければと心の底からの怒りとともに決意を固めました。

春闘回答指定日に希望退職提案

九二年三月二六日は、春闘の回答指定日でした。ところが会社は労組三役を呼び「昨年に引き続き業績が厳しく今年も赤字である。NTT関連の仕事の落ち込みもひどく今後回復は望めない。製品コストも高くこのままではやって行けない」として、突然「二〇〇名の人員削減・資産処分・事業部制」を柱とする再建案を労組に提案してきました。その内容は二〇〇名人員削減を秩父・坂戸・美里の製造工場での希望退職で行うとし、和光の設計・東京本社営業部門は対象から除くというものでした。この提案は、大倉の労働者はもちろん、家族や地域に働く人たち・労働組合にとって大変な衝撃であり、「人員削減

反対」で交渉してきましたが、会社は五月一八日交渉を打ち切り、一九日より六月末にわたり「希望退職」を強行しました。その中で五六名もの仲間が辞めさせられました。

厳しい闘いが一段落したと思ったのも束の間、会社は七月六日「希望退職が二〇〇名に達しなかった。四月から六月までの業績も厳しいので八月三十一日をもって秩父工場を閉鎖する。よって一八〇名は他事業所への配転、一三〇名を整理解雇する」と追い打ちをかけてきました。労働組合は「すべて会社の責任であり、製造部門だけに責任を転嫁できる問題でもなく働くものの犠牲は許せない。秩父工場の閉鎖や指名整理解雇はなおさらである」と交渉してきましたが、最終的には全社での希望退職の代案をもって案件解決に努力してきました。しかし、会社はわずかに四回目の交渉で「労組提案は受け入れられない、もう時間が無い」と交渉を打ち切り、冒頭の報告のような暴挙に出てきたのでした。

秩父地区労働運動は権利の砦

大倉電気は一九四三年に株式会社として秩父工場新設と同時に設立された産業用機器（工業計器・電力関連）および伝送用機器の製造販売を行う中堅企業で、ここ数年の平均売上高は二〇〇億、資本金四〇億、今年の六月末の従業員は約一一〇〇名でした。本社は東京杉並にあり、おもな事業所として埼玉県皆野町に秩父工場・坂戸市に坂戸工場・美里町に美里工場・和光市に技術センター、その他北海道から九州まで八つの営業所があります。会社は七〇年代から八〇年代にかけ急成長をとげ八六年には東証第一部に上場、八七・八八年度と史上空前の売上と利益を上げ、八九年度までの数年間での累積利益が一〇〇億を超えるほどでした。

その間会社は、内外の情勢を巧みに利用・先取りし、七一年には秩父工場に約五〇名働いていた臨時工全員の解雇の攻撃をかけ、七六年には二期連続赤字と先行き不安・電電公社依存体質からの脱却を理由に「二〇〇名希望退職」を強行しました。八一から八二年にかけては利益低下が予想されるとし「総合対策」と称して秩父支部組合員に合意なき強制配転をかけ、八六年には工場の統配合を自論み美里工場を新設、秩父工場より約一〇〇名の大量配転を強行しました。そして今回、二期連続の赤字（累積で約二〇億）を理由として合理化攻撃をしました。その狙いは秩父の労働運動・組織潰しであり、かつ労働者の人権までも奪う工場閉鎖・全員解雇であり、けっして許されるものではありません。

私の所属している大倉労組秩父支部は、秩父盆地に位置し一九四六年に発足した秩父地区労働組合協議会とともに日常不断のため運動の積み重ねと社会党秩父総支部との連携・共闘により、働き生き続ける権利を守り向上させてきています。婦人の育児時間や育児休暇の確保、看護休暇の獲得、生理休暇の取得（九一年の取得率九〇％）、年次有給休暇の完全取得に向けた取り組み（七一年から七五年にかけ全員の業務上を勝ち取る）、臨時解雇を我が事としてとらえた臨時工裁判闘争（約六カ月で職場復帰を勝ち取る）、同意なき広域配転反対闘争、一人の首切りもゆるさぬ地域での共闘など、地域の多くの仲間を支えの中で努力してきました。こうした秩父地区労を軸とした地道でかつ勇敢なたたかべが背景にあつて、大倉労組もその共闘のいったんを担え、自治体への議員派遣（延べ四名）もでき得たと思えます。

大倉労組は支援を提起

今回の「二〇〇名首切り」攻撃から、秩父工場閉鎖・全員整理解雇・強制配転攻撃に対しても、いち早く秩父地区労は地域の多くの労働者によびかけ、「秩父工場閉鎖反対・指名解雇反対」の緊急抗議集会を開催、さらには「工場存続・指名解雇撤回」を求める署名行動を職場・地域で展開し、数日間を集めた四〇〇〇名に近い署名をもって本社への要請行動を起こしています。工場の立地している皆野町・商工会そして秩父郡市内の市町村長も挙げて「工場存続」を求める陳情書を会社に提出しました。皆野町を初め近隣の方々からも「あまりにも酷い仕打ちだ、こんなことが許されてはならない。ぜひ頑張ってください」との激励が相次いでいます。

大倉労組は八月二二日の中央集会で「解雇された組合員が提訴した場合、争議団をつくる」「闘争資金の一部を支援していく」という方針を提起しました。全面支援ではありませんが、労働組合にとって大切な提起です。秩父支部では指名整理解雇者の九割もの組合員が退職を決意した後で休暇に入っていました。全員の大会参加と支援決定を勝ち取るべく一人ひとりへの呼びかけや出欠確認を行い、数名の組合員を除いてほとんどの組合員が参加された中で支援金についての投票が行われました。結果はわずか一票差での可決でしたが、今後もこの緊迫した状況の中で内外から闘争の切り崩しも予想されます。

支援共闘会議結成に七百人

しかし、秩父地区労はもとより、近隣の地区労・社会党・自治体住民の方々からも支援の声や共闘を担うとの力強い声が返ってくるなか、去る九月一八日、私たち大倉電気争議団八名は、労働者が人間として扱われ生活していける権利を守り抜き、不当な組織破壊・工場潰し・人権剥奪攻撃を撤回させるため浦和地裁秩父支部に「雇用契約存在確認等」を求めて提訴致しました。さらに一〇月九日には、寄居・熊谷・比企西部・秩父の地区労と大倉労組などの呼びかけで「大倉電気支援共闘会議創立決起集会」をこのたたかひの発祥の地・皆野町の文化会館で開催。県内や地元秩父はもとより多くの仲間七〇〇名が参加するなか、全国に共闘の輪を拡げ勝利するまでたたかう決意を固めました。

あの嵐のような攻撃から二カ月余が経ちましたが、就職難の秩父にあって一三〇名の整理解雇者の内一割すら再就職できず、僅かの雇用保険での生活でますます怒りと不安がつづいています。強行配転された仲間は、大幅人員削減後の職場での労働強化や「不況」宣伝・監視の強められるなか、さらには帰宅が午後七時から八時になってしまうような長時間通勤により生活が破壊されてきています。そのような状況下で数名の仲間が退職に追い込まれています。私たちは一三〇名の解雇された仲間はもちろん、解雇同然の強制配転にも負けず頑張っている一六〇名余の仲間の立場に立ち、秩父地域はもとより埼玉県内・全国の心ある仲間との共闘をめざして、精一杯頑張ります。

敵よりも一日でも長くたたかひ、一日も早く勝利できますよう、全国の同志の皆さんの絶大なご理解とご協力・共闘へのお力添えをお願いします。

働く者への犠牲転嫁は許せない

資料1 大倉電気争議支援共闘会議創立決起集会「宣言」(九二・一〇・九)

大倉電気資本(社長大倉淳平)は、いわゆるバブル破綻不況に便乗し、一九九二年八月、同社最大の秩父工場の閉鎖、同工場に働く一三〇名の指名整理解雇と一八〇名の強制配転を強行しました。他に例を見ないこの仕打ちには、単に何らの正当性を持たないのみならず働く者の人権と労働組合を一方的に無視し、また、皆野町をはじめ各自自治体からの「秩父工場存続」を求める要請にもまったく耳を貸さぬ言語道断なやり方です。

川田見生君を代表とする大倉電気争議団八名は、整理解雇や強制配転をうけたすべての仲間たちの思いを我が思いとしつつ去る九月一八日に浦和地方裁判所秩父支部に「不当な工場閉鎖による整理解雇撤回」を求めて提訴しました。

経営側は、いずれもバブル破綻を理由とする大幅人減らしを企てています。私たちが今回の大倉資本のやり口を見過せば、多くの経営側はこれを突破口として整理解雇を軸とする権利破壊攻勢を展開してくるにちがひありません。

こうして新聞・テレビ・週刊誌など国内・外のマスコミも、不況口実の首切りを他にさきがけて強行した大倉電気資本の実に強引なやり方にいっせいに注目し異例の報道を展開しています。

働く者にとってこの大倉電気争議団のたたかいはすべての働く仲間のためのたたかいであり、このたたかいをたたかいくことで第二、第三の「大倉電気の仕事」を許さず、すべての働く者の権利を守り、秩父をはじめ日本列島における産業空洞化を阻止する道がひらけると確信します。

すべての働く仲間の皆さん、この創立決起集会を契機に、大倉電気争議団のたたかいを自らのたたかいとして、支援共闘会議の輪を秩父から埼玉へ、埼玉から全国へと広げ、最後の勝利までともにたたかっていきましょう。

「大倉電気争議団」

所在地 埼玉県秩父市寺尾一五三 秩父社会文化会館内(電話〇四九四一二四―三二一〇)

「大倉電気争議支援共闘会議」

所在地 埼玉県秩父市上宮地町二七―五(電話〇四九四一二二―一八四七)

会費 一般会員 年三、六〇〇円 団体会員 年一〇、〇〇〇円

「緊急資金カンパ」 カンパ金額 個人一口一、〇〇〇円以上 団体一口一〇、〇〇〇円以上

共闘会議の会費・緊急資金カンパ振り込み先

埼玉労働金庫秩父支店 普通預金 口座番号 四〇八四三三九(名義 大倉電気争議団・代表 川田)

話し合いが職場抵抗闘争の土台

——職場闘争改善へのとりくみ (一)——

活動家の枠かみしも

八六年会社組織の再編成に伴い要員は半減し、不慣れな仕事も増え一日が終わるとぐったりしました。また家に帰っても仕事の事が頭によく浮かびました。翌年には、半月で一人十四時間分の超勤割当表がだされ、それを撤回させるのがやっとの状況でした。そして、職場の仲間から「今は超勤をしないと要員要求しても、上では『超勤をしない人がいるが、仕事はそれでもまわっている』という見方をされる。」という話に対して、「それでは私が毎月何時間、何年間超勤をやれば要員が増えるのか」と反論すると、相手が黙ってしまったのを見て多少いい気になっていました。あるいは、酒飲みのときには「あんたが超勤やってくれば、みんなも少しは楽になる」と言われれば、酒を飲んでいた勢いも手伝って「暇なときはいっさい超勤はやらせず今になって超勤をやれで腹が立つ」と口論になりました。要員が足りないということは全体が一致していたが、このように「私は超勤をやらぬ主義です」等と自らの意見を主張する余り、一致点を深め合うのでなく、あるいは話し合いを通じてお互いの考え方を受け止めあう(共通認識をつくる)のではなく、変な「対立」を仲間との間につくっていたと思います。

また、活動家の中でも「みんなが超勤を連日やっている中で自分だけやらないわけにはいかない」という状態もありました。このような話に対しても、じっくり話し合うのではなく、「活動家としてそれで良いのか。今までさまざまな差別——新技術は教えない、昼飯は一緒に食わない、冠婚葬祭の差別、出勤日を間違えて処分の恫喝等々——を受けてきたことを忘れたのか」という接し方でした。しかし、私自身も超勤をやらない分、時間内は目一杯働くという状態で超勤をやらずに帰るのがうしろめたい気分になることも、しばしばありました。このように職場の仲間と私自身の気分は紙一重のところになりました。しかし、「活動家」という枠が脱げず仲間がどんな思いで働いているかの把握も不十分のまま、あるいは仲間のぶつかっている具体的実態から出発せず、一挙にマルクス経済学のいうところの「超勤は搾取率の強化」「我々は労働力を売っている。仕事が残ってもそれは会社の責任」等の思想的な統一を、職場の仲間と、どのようにしたらはかれるか、あるいは「正しい」主張をどう拡げると悶々していました。

退職する仲間

このような職場実態のなかで最もひどいのがデスク作業のAさんの仕事でした。連日の超勤で夜の十一時、十二時に帰るときも珍しくありませんでした。玄関のシャッターは夜十時頃には閉まります。そこで私が泊まり勤務のとき裏から帰るのでドアを閉めてほしいとよく頼まれました。そんなときは、「仕事、大変だね。泊まりの時は手伝うよ」と話しかけても、「私の能力がないから仕方がない」と話し合うことすら拒否をされる状態でした。他の活動家が話してもAさんの答えは同じでした。

当時、民営化前に剝奪された十時のお茶飲み休憩を復活させるなどの努力はしました。

しかし結局のところ私の運動パターンは、それまで職場の問題を取り上げても、管理者に抗議する、あるいは職場集会でその問題を主張し、組合が取り上げられなければ組合が悪いという程度に終わっていました。Aさんから話し合いを拒否されたことは、本人と話し合い納得づくで問題を取り上げていくというよりは、本人との話し合い抜きに本人に代わって「問題にしてやる」「たたかってやる」と、七〇年代の運動の弱点を総括したつもりでしたが、依然としてそこから脱しきれずにいた表れだったのかも知れません。

そして、遂にAさんは会社を辞めるという噂までとびました。話さなければならぬのは当然のことでした。しかし、日常的に話し合いができていなくて気がかり焦り、また話し合いを拒否されるのではないかと思ひ悩む毎日でした。結果的にはAさんは他の勤務に変わり最悪の事態には至らずに済みました。みんなでも話し合う条件がないなかで、Aさんは退職という「自己解決」を考えざるをえなかったのでしょうか。

どう話し合いをつくるか

その後もこのデスク作業については、一人作業で問題が多いため人が次々と変わるだけで問題はいつこうに解決しませんでした。私は、このようななかでも率直に仲間と話をしたり、会社に抗議をしたりできませんでした。

その理由は、長期にわたる攻撃のなかで仲間と分断されていることもさることながら、第一には前述の通り「超勤は搾取率の強化だ」「超勤をして仕事をまわしている限り、会社は要員増は考えない」「だから超勤するのはおかしい」等と、活動家の棒が脱げずに、これが「絶対的に」正しい主張だと思ひ込んでいました。そして、私の主張に反対の意見を述べようとすれば「いや、ちょっと待って下さい」「とにかく」というようにささぎって、仲間の話を聞こうとしない。どんなに私の主張が理路整然としていても、相手の気持ちを無視しておいて、共に抵抗しよう、たたかおうと呼びかけていたところに無理があったと思います。即ち、正しい主張も、仲間が受け入れられる条件がないなかでは、あるいは仲間の具体的にぶつかっている現実の問題や仲間の経験から出発していない点に逆に「垣根」や変な「対立」を生み、仲間と率直に話ができない状態をつくりだしていました。

第二には忙しい中で自分が超勤をやらずにこの問題を取り上げたとき、「要員増は現状では無理だ。みんなも超勤で疲れている。あなたが超勤をやって手伝って欲しい」と言われたとき反論できないと、頭の中で考え躊躇していました。

第三には、忙しい職場の中で自分だけが定時に帰るのがうしろめたい気分もあり、そのことが負目になり率直に話し合いができない重しになっていました。しかし、Aさんが退職を決意しても話もできない反省や活動家内での「ぐち」の報告と討論を通じて、まずみんなはどんな思いで働いているのかつかめなくては、私の主張も通らないと少しずつ変わっていききました。

話し合いができないなかで始めたのは、それまで聞き流していた話の中からどんな気分でみんなは働いているのかをつかむことでした。——つかんだ仲間の気分は「超勤もやらずに人よこせはオカシイ。」「月十五時間くらいなら超勤しても疲れないし、金にもなる。」「超勤の連続で疲れるが、仕事はまわさなければならぬ。」「超勤を断わりずらいから年休をとった。」「オカシイ（作業量の少ない）超勤をやりたい。」「等々ということでした。

このように仲間の中に不平・不満がないわけではありませんが、それは超勤前提の不満

でした。あるいは本来会社に向くべき不平・不満が、仲間同士にむいている場面も少なくありません。しかし、どんなに作業が増えても仕事をこなすために超勤を連日しているように見える職場の仲間も、生活や健康を犠牲にしてまで働きたくないというものは誰もが否定しません。ここはみんなが一致します。このように整理ができると、自分が超勤をしないことの負目は少し小さくなりました。同時にみんなの不平・不満を要求するには、どうしたらいいかと前向きに考えられるようになっていきました。即ち、話し合いをつくるうえで重要なことは、「会社の施策に従っている」「超勤ばかりしている」などの現象や、仲間との考え方の違いに眼を奪われるのではなく、仲間との共通点・一致点をみつけだすことだと思えます。

仲間との「垣根」がとれる

さらに大きな転機となったのが、八八年の職場の反対の声を無視した係合同の強行でした。しかも当初の説明と食い違い、故障修理等の仕事が増加し職場での不満が大きくなりました。仲間と何が一致するのか、よりハッキリしてきました。

八九年、二度目の組織再編に際して、事前に会社側の意向調査——実は「意向調査」とは名ばかりで、会社の裁量で配転を強要する場——行われました。組合は「第三希望まで言わない人は、どこへ配転されても責任はもてない」という態度でした。私は八六年の組織再編成のときのことを思い起こしました。このとき門前ビラで連日のように「強制配転反対」を訴えましたが、職場は静まりかえり、活動家は四つの職場にバラバラに配転されました。そして、今回も八六年のときのように問答無用に配転が強行されるのではないかと不安になりました。時間がないなかで意向調査にどのような態度で臨んだらいいのか迷いました。

そこで、どんな答えが返ってくるか怖さもありませんでしたが、青い顔をして仲間聞いてまわりました。意向調査を終えた仲間は不安げに「第三希望まで言えというから、いくら粘ってもだめだ」と思い第三希望まで言った」ということでした。また「現局以外の仕事の内容を聞いても課長は答えられない、これでどうして第二希望以下を言えるのか」と課長を質問責めにする仲間や、「どんなことを言われても現局希望を貫け」とアドバイスしてくれる仲間。組合に「なぜ第三希望まで言わなくてはいけないのか。これでは本人希望による配転とは言えない」と話す仲間等々に支えられながら、私は三回にわたる会社の意向調査でも「現局希望。第二、第三希望は仕事の内容も分からないので言えない」と貫くことができました。

結果は職場の実情を全く無視して、「現局」を強く希望した二人を含むベテラン五人が一挙に配転されました。現局を強く希望した二人は怒り「苦情処理」を出すという話になりましたが、支えきれませんでした。そして、この配転によって新技術の仕事や、泊まり勤務・故障修理ができる人がギリギリの人数になり「これでは仕事がまわらない」という不満が、一週間ほど超勤が止るといふ形となって現れました。今にして思えば、生活を考え仕事を一生懸命にやってきた結果、このような扱われ方をされたことに対する憤りだったのでしょうか。このときになって、やっとふっきました。日常的に話し合いが不十分なため、仲間の不満の多くは会社ではなく、超勤をやらない私の方に向いてくると思ひ込んでいましたが、そうではないとやっとわかりました。(つづく、全電通・K)

P K O 反対に行動をおこせ

——怠惰は最大の敵——

れっきとした軍隊である自衛隊が憲法のタブーを破って戦後初めて海外へ出兵した。九月一七日呉基地から、同二三、四日小牧基地から、一〇月一、二日にも小牧基地から、同二三日名古屋空港から。カンボジアへカンボジアへと自衛隊がなびく。カンボジアの次の派遣先はアンゴラだ。その次は朝鮮半島か。紛争のあるところ世界全域が派遣の対象となる。民族紛争、革命闘争、帝国主義覇権に逆らう者ごとく蹴散らす魂胆である。

日本の軍隊が五〇年の眠りをさますようにしてやってくるというので、フィリピンでもカンボジアでも民衆の抗議行動が起きている。しかし、日本の新聞はそれら民衆の真の動きを伝えていない。P K O 隊の苦勞話ばかりが入ってくるようになった。

他国民衆の痛みは、日本に住む私たちの痛みである。社会党が日和つても、連合がサボタージュしても、評論家がどんなにごまかしても、私たちは「ダメなものダメ」と声を大にして叫び、行動したい。憲法を守るためである。P K O に反対することは、小選挙区制に反対し、社会党の解体に反対し、たたかう労働運動の潰滅に反対し、そのことが私たちの生活と暮らしを守ることになるからだ。

九月一七日、東京で自衛隊の海外派兵に反対する緊急集会が開催され、三千名が集集した。同二七日、京都宇治市にある大久保駐屯地を二千五百名が取り囲む「人間の鎖」行動が行われた。一〇月一日の社会党主催の集会には五千名が集まった。さらに同一二日、防衛庁包囲デモに二千名が集集した。主体はいずれも労働者、市民である。

何かしなければならぬ。上からの指示はなく、あつても遅い。まして、普段の政治教育は皆無である。行動の第一歩は、私から始まる。そういう情勢である。連合や社会党を批判だけでも始まらない。P K O 部隊が目の前で海外へ出動していくのをどうするか？問題なのだから。「長いものに巻かれて」も一時は安心かも知れない。しかし、巻かれて窒息死するのは民主主義と憲法であり、最後はあなたであり私だ。

居酒屋に駆け込むひまがあったら、集会に出かけてみよう。集会がなかったら、人集めから始めてみよう。人が集まれば、学習がおのずと必要になる。P K O ってなに？どうして憲法違反なの？学習はそういう疑問から始まる。教材はたくさんある。新聞もいい。社会通信がもっともいい。

集会に行けば行ったでいろいろなことを実感する。関西と東京、労働組合と市民運動、あの団体、この団体、まだまだこれだけの平和勢力ががんばっているとか、ヒューマンチェーンで手をつなぐ見知らぬおばさん。「若い男（ひと）と手をつなぐなんて、キャットキヤツ」てなこともある。基地の門前に立つ自衛隊員、それをガードする機動隊。なかに、基地内でのんびりジョギングする隊員もいる。

大久保基地のある宇治のあの辺りは、山本宣治が活躍したところで、基地ができる前は農民運動が盛んだったという話も聞いた。体を動かせば、頭脳が動く。頭脳が動けば理論探究心がわき、さらに見える世界が広がる。だって考えてもみなさい。私たち庶民感情からすると、P K O や憲法よりも、佐川疑獄で五億円もくすね、臭いものにフタをした権力構造の方に頭にくるでしょ。頭にきたら何をなすべきか、ともかく自分が主人公になって考えることですよ。怠惰は最大の敵です。

(H)

日本的「現実主義」の構造

「日本の革新（政党）は現実主義的ではない！」との論議がまたぞろかまびすしい。日本のジャーナリズム（またはこれを牛耳るイデオログ）には、日本の革新政党は超理想主義の党に映るらしい。

例えば、やっと「新誓言」で「現実主義」路線へと「転換」したかに見えた社会党が、こんどのPKO法案国会では「牛歩戦術」「議員辞職」等々で頑強な抵抗を示した。

「ムダなこと」に多大なエネルギーを費やすのは「現実的ではない」と彼らはみる。

PKO法案をめぐる力関係は、自公民対社共、民連……、連合を加えても数では推進派に及ばない。「現実」に先が見えていないか、「なら抵抗はムダだ」というのが「現実主義」のなかみのようだ。

数と議会制民主主義

ようするに数の論理に対し頭を下げよ。いさぎよく降参せよ……ということとを別な表現で示したものが「現実政党たれ」、あるいは「そろそろ『抵抗政党』を卒業したら……!?!」という、お節介な忠告？なのである。だがそれは少数野党の存在とその機能の否定に通ずる。

反対派の存在と「抵抗」を含むその機能を否定する議会制民主主義というのは論理の矛盾であろう。

「牛歩の如き、議会制民主主義否定の戦術をとる社共、社民連……。言論の府である国会を何と心得る!!」とまあ、威丈高にのたまう人もあるが、事態は流れの中で判断しなければ公平を失する。「言論の府」である国会で反対党にモノを云わせない異常な議会運営を強行したのは、数におごる自公民であった。

「牛歩戦術」を「開発」したのは、決して社共等革新野党ではない。昔、保守党の一派闊だった大野伴睦らが、やっぱり主流派に抵抗するギリギリの戦術として編み出したのがこの「牛歩戦術」であった。

国論を二分し、民族、国家の命運がかかる重要問題において、異常、不当な国会運営が行われているとき、これに抵抗しない反対党があるとすれば、それは反対党、野党の名に値しない。

「現実主義党たれ!」との主張は、古臭い日本の表現「長いモノにはまかれろ!」とする論理に帰着する。

「現実主義者」は、「結論の定まっていること」に「空理空論」で異を唱える人びとに我慢がならない。「原理、原則ばかり並べおって……!」ともいうところを見ると、その「空理、空論」とは「原理、原則」のことらしい。この人びとは、あげくの果てに「政治にこむずかしいイデオロギー理念は要らない!」とまでいいきる。

とすると「現実主義」とは「現実」に対しあれこれいちゃもんをつけず、素直にこれを容認する考え方のようだ。

その「現実主義」のもとでは、誰が、どのようにその「現実」を形成し、それが個人や社会にどのような明暗を投げかけているか、その事態がいったい善なのか悪なのか……こういった疑問が全てネグられる、つまり無視されてしまうのである。確かに、こういったことを無視するのであれば理念はいらぬ。理念とは物事の善悪の区別を含む、いわば価値判断の基盤となるモノの考え方だからだ。

こうして、彼らの求める「現実主義政党」とは、与党、つまり多数党、多数派に、無批判に追随する党を指すことが判明する。そういう党派だけで成り立つ国会制度が本当に議会民主制といえるのだろうか。

多数党が少数人数を無視し、何でも数で押し切るのなら「審議」という言葉自体もナンセンスである。多数決至上主義はかくて「言論の府」の自「否定」に通じ、いわゆる全体主義、ファシズムに通ずる論理であることがはっきりする。

理念の否定は理性の否定。原理・原則の否定は善悪の区別の否定にも連なる。だから、倫理も否定される。

自浄能力は皆無

「政治倫理」がとり沙汰されてから既に久しいが、政界の金権体質が少しも変わらないのは別に不思議ではない。彼らにはもともと倫理がないのである。倫理のない人びとに倫理を問うことがそもそもおかしいのかも知れない。理念（善悪、良否の判断規準）のない人に倫理のある訳はない。

だから、汚職・疑獄で摘発された奴は運が悪い奴で、捕まらないようにうまくやる、目だぬように地味にやる。とくに、派閥からもらう金なら、少なくとも自分にはいっさい火の粉がかからない。金権という現世的利益の前には、理念とか哲学とかというのは書生ッポの議論、青臭い空理・空論だと彼らは考えているに違いない。金力、権力なしに肩で風を切るわけにはいかない。理屈、理念で腹は膨れはしない。一文の得にもならない。

で、カネのある派閥が与党の中でもたくさん陣傘を集める。金権にありつけるなら、理念も倫理も尻の河童。そういう人達が国政の中枢に君臨し、金権を駆使して世を統べる。逆らう奴には冷飯をくわせる……！

これが「現実主義」の背景にある。冷飯を食いたくなければ、差別されたくなければ長いものに捲かれるに如くはない。——まさに投降主義の倫理、保身の論理であり、保守主義の固い基盤をなす論理なのである。

佐川——金丸問題はその上に生じた。金丸会長留任に走る派閥陣傘たちの姿は、改めて彼らの倫理（理念）不在を見せつけている。

野党までがそうなつてはお終いである。

（滝沢 隆）

国鉄闘争に広がる支援・連帯の輪

——天理市の教組が「激励交流」記録を発刊——

国労は幸せな組合だ。本誌第五一七号に掲載した刺使河原千津氏のような仲間がなんと多いことか。彼らは手弁当で国鉄闘争支援に駆けめぐる。奈良でも支援・連帯の輪が一回り強く大きくなった。天理市教育労働者組合の仲間七人が、国労博多闘争団と交流。その交流の記録がまとめられた。タイトルは『みんながいるから闘える……!』——九二二六 教労学習旅行 国労博多闘争団激励交流記録感想集(五〇ページ、頒価三百円・送料別)。交流に参加した仲間は「激励の旅で、我励まされ」と、詩に託しこう印象を綴っている。「今回の旅行は、『天教労・国労博多闘争団激励交流旅行』だった。国労博多闘争団との交流を深めるとともに、『激励』することを目的にした旅行だったはずである。ところが、旅を終えてみると、誰よりも励まされたのはほく自身だった。

最初の闘争団事務局との交流で、『日教組の『教え子を再び戦場に送るな』のスローガンは、国労の『分割民営化反対』と同じ重みがある』と神宮委員長に言われたとき、ぼくは先制の一撃を食らわされた。教組の役員をしているとは言え、ぼくの運動は性根が座っちゃいない。ましてや、生活と生命をかけて『教え子を……』のスローガンを守ることなど、正直言って考えたことなどなかった。そんな薄っぺらな運動をしていて、闘争団との『交流』だなんて、その薄さを見透かされそうで尻の座りが悪かった。

そんなばくらくに、闘争団の人たちは、『自分の問題でもないのに、カンパや物販に頑張ってくれる仲間を裏切れない』と思って闘い続けているのだと語ってくれた。これは、相当ダメージのある一撃になった。闘争団・家族との交流の席上、檄布が回って来たとき、『国鉄の闘い続く限り、反臨教審の旗降ろすまじ』と書いた。精一杯の偽らぬ気持ちだった。野田さん一家との出会いは、致命的な一撃になった。

今の学校の多くの職場がそうであるように、かつての国鉄の職場も『同じ釜の飯を食った仲』というファミリー的なつながりの職場だったという。それがある日突然に、職務命令と処分を振りかざす管理職に変わっていったという。人間が一八〇度変わるものかと思うが、自らの身を守るためにはそうなんだと言われた。『学校はそんなことはないだろう』と思ってきたが、そんな思いには何の保証もない。『あんたらしっかりしなきゃ』と言われていたような気がした。野田さん本人だけじゃない。奥さんも、おばあちゃんまでもが、巨大な『敵』と闘っている。己が小さく見える。KO負けだ。

KO負けを食らって、ぼくは逆にエネルギーと元気をもらった。お金がすべてであるかのような時代に、人間であり続けようと闘っている人たちがいる。その人たちが、『お前も人間でありたいなら、しっかりと自分の職場の守りを固めよ』と励ましてくれている。

支援じゃなく、激励じゃなく、連帯と共闘をこそ我が課題としたい。まずは、我が職場での反合理化・反臨教審の闘いをきちんとやりきること。併せて、国労の闘争に具体的に繋がれる取り組みを推し進めること。これが、博多でもらった元気に応える中身だと、自分に言い聞かせている。』

お申し込み先 天理市教育労働者組合(住所・奈良県天理市丹波市町一八〇 電話〇七四三六一二―五九五九)。

◇ 読者からのおたより ◇

批判と希望 第五一九号拝受。さっそく都本部問題と取り上げて下さり、どうもありがとうございます。腐りきっています。この号は好調。批判と希望の双方がある。(議員・T)

編集部より いつも励ましのおたより、心からお礼申し上げます。佐川・金丸スキャンダルへの社会党の態度に、胃が痛くなる思いです。このままでは見捨てられてしまいません。ご奮闘を。

誤配に一言 「社会通信」をお送りいただいておりますが、今般、私宛のものを区内の方へまともて送付なさったようで、直接郵送されませんでした。住所も名前も間違っておりませんし、私はあくまで個人的に送付して頂くよう存じておりました。個人的な送付を必ずして頂くように必ずご承知おき下さい。(東京・Y)

編集部より ご迷惑かけました。一言だけ申し上げます。第三種郵便の発送は郵政の相次ぐ合理化で、地域別にまとめて出すようになってきました。Yさんの地域ですと、個別発送の分をYさんの地域に束ねるといわけです。ところが最近、郵便局が忙しくなったこと、郵便局の区分けにアルバイトがあたっているからでしょう。束ねられた郵便物がそのまま届けられるという誤配が多いのです。数年前まではこんな初歩的な誤りはなかったのですが、Yさんが迷惑されたように、私も差出人も郵政の合理化にたいへん迷惑させられています。もし同じようなことがございましたときには一報ください。郵政局にモノ申しますから。

新潟県知事選で混乱 今、高教組の党員から電話があり、昨日、高教組の県委員会で平山候補の推せんを提案したけれど、否定されたとのこと。代議員百二十名中、平山不支持・推せんしないが自由投票で三三票、平山支持・原案賛成が五七票、下部討議をしてきていないところは態度保留で三一名ほど。したがって、過半数に四票不足で否決され、平山候補も会場前に来ていたが、あいさつもできずに帰ったとのこと。県評センター、連合にも役員を送り、県内では「三家につく戦闘的な組合ですから影響は大きいでしょう」。

掲載ありがとうございます 本来、私もから記事をお送りしなければならぬところ、「社会通信」に載せて頂いてたいへん恐縮しております。今後とも宜しく！(京都・Y)

編集部より おたよりありがとうございます。「反合闘争」を怠っていたつけが多く労働者、組合にふりかかっています。つい先日には埼玉県秩父市の大倉電気秩父工場閉鎖に反対し、解雇撤回をめざす集会に約七百人が参加したとのこと。国鉄闘争に連帯したたかうことで展望が開けると思います。ともにがんばりましょう。

転職で解決できるの ある雑誌に転職についての話のついでにありました。転職にともなう五つの？です。一、転職はキャリアになるか、二、転職はベースアップになるか、三、転職は問題解決になるか、四、転職は周囲に何を残すか、五、転職で天職をまっとうできるか。みなさんどう読みましたか。この人たちが何を求めて転職してくるのか、また何が問題で転職していくのかを十分に考える時ではと思ったりします。(みんなNo二五五六)

桐原氏(「紙ひとえ」著者)と歓談 国労大会二日目の夜、鹿児島県人会に酒田(新橋支部委員長)氏に誘われ、同席。桐原委員長をはじめ『紙ひとえ』の登場人物の方々と楽しく交流することができました。(国労・W)